

西洋中世写本の複製（ファクシミリ）について

折 田 洋 晴

筆者等は本誌第51号（1999.10）に「国立国会図書館所蔵複製インキュナブラ目録」を掲載した。その時から、西洋中世の写本（マニユスクリプト）の複製についても同様の目録を作成する計画を立て、この度完成したので本号に載せている。ファクシミリ本は近年、非常に精巧なものが多数刊行されるようになり、ひとつの確立したジャンルとなっており、これを熱心に収集する図書館も多い。ここでは、ファクシミリ本出版の簡単な歴史とその書誌、あるいは各図書館でのファクシミリの取り扱いについて述べてみたい。

ファクシミリとは

前に「本物とそっくりのものを、短時間で大量に作ること」こそゲーテンベルクが印刷術を発明した目的であったと書いた。実は、facsimileとは「似たもの（simile）を作る（facere）」という意味で、*OED*によれば初出は1691年である。すると印刷術とは効率的なファクシミリの技法であると言うことも出来よう。『42行聖書』については、そのモデルとなった写本が特定されているわけではないが、米国議会図書館にある『マインツの大型聖書』のようにテキスト、書体、造本の特徴の似た写本も見付かっている。実は写本同士で似ているものは多いのである。

12月25日をキリストの誕生日として祝った最古の記録として知られている『フィロカルの暦』はもともと4世紀中葉にローマで作られたものだが、9世紀のカロリング朝時代に模本が作られ、その模本を基に、16世紀に入って何度も手で複製された写本である。4世紀、9世紀のものは現存せず、16-17世紀の模本がローマ法王ダマス1世（在位366-84年）に仕えた能書家フィロカルの名を伝えているのみであるが、彼の書体はカタコンベを飾るダマス1世の碑文に残っている。模本としては、1620年にフランスのコレクター N.C.F. de Peiresc (1580-1637) が作らせたものがあるが有名で、現在ヴァチカン図書館に蔵されているが、Peiresc は当時流行し始めた古物研究のためファクシミリを作らせたのである。また彼は、現在英国図書館が所蔵する5世紀の写本『コットン創世記』の模本も作成したが、未完成に終わった。このように手で写

す方法で複製を作ることは古くから行なわれて来たとし、印刷術発明後も行なわれた。

しかし印刷術の発明により同じものを大量に作る事が出来るようになると、活字の書体は標準的なものへと一本化されて行き、活字とは異なる書体はヴィジュアルな印刷技法である木版画、銅版画（エングレーヴィング、エッチング）の印刷技法が取られた。1583年にインゴルシュタットで刊行された *Liber precatationum quas Carolus Calvus imperator ...* は現在ミュンヘンの Schatzkammer に蔵されている9世紀の写本『カール禿頭王の祈禱書』を部分的に銅版で複製しているし、1626-33年にアントワープで刊行された *Martyrologium Hieronymianum* はエヒテルナッハにある写本を銅版で複製したものである。あるいは、1697年にフランクフルトで刊行された H. G. von Thülemeyer: *Tractatio de Bulla aurea ...* は現在ウィーンのオーストリア国立図書館に蔵されている1400年筆写の写本『金印憲章』(Ms. 338) を銅版で複製したものを含んでいる。このように、17世紀にテキストだけでなく書体までも複製した書籍が刊行されたのは、当時近代古文書学が勃興しており、本文批評という考え方が始まりつつあったことによるのであろう。最初の古文書学の教科書である J. Mabillon: *De re diplomatica* (Paris, 1681 邦訳『ヨーロッパ中世古文書学』2000) は写本の様々な書体を P. Giffart の彫った銅版挿図で示している。また、カリグラフィーの研究書として有名な D.M. Servidori: *Reflexiones sobre la verdadera arte de escribir* (Madrid, 1789) も能書の豊富な実例を銅版挿図で示している。

しかし、複製技術に大きな変革をもたらしたのは、ほぼ同時代に起きた A. Senefelder (1771-1834) による石版印刷術（リトグラフ）の発明（1796）と J. N. Niepce (1765-1833) による写真術の発明（1822）であった。折からの書誌学研究の興隆とあいまって、新技術を用いた写本・初期印刷本の複製が多数刊行されるようになり、愛書家の集まりであるロンドンのロクスバラ・クラブが稀書の複製を刊行し始めたのも、A. de Bastard d'Estang: *Peintures et ornements des manuscrits* (1832-69), H. Shaw: *Illuminated ornaments* (1833) のような着色石版画による彩色写本の挿図集が刊行されたのも、この時代である。19世紀後半にはコロタイプ（1855）、写真凹版（1875）、網目スクリーン（1886）という印刷技法も発明され、古文書学研究用に古文書の複製資料集のようなシリーズが刊行され始める。さらに20世紀に入るとオフセット印刷が発明され（1904）、写真技術と組み合わせることにより精巧な印刷複製が可能となり、豪華な美術書や完全なレプリカ（全体が複製され、サイズや色彩も忠実に再現されており、製本の状態もオリジナルと同じにしたもの）を多数作ることが可能となった。現在では非常に高度な印刷技術を利用した複製本が刊行されており、紙もオリジナルの手触りと同じものが作られている。

資料保存の観点から、大きな写本コレクションをマイクロ化することも広く行なわれ、商品化もされている。さらには、最近のデジタル技術の発達により、写本や古本もデジタル化されて、CD-ROM 形態で刊行されたり、インターネット上で公開されている。これらもオリジナルの複製であるので、ファクシミリであると言えるだろう。

日本の古典籍についてもファクシミリが多数作成されており、その技法により模写、模刻、復刻、影印等と呼ばれている。模写では『平家納経』等の副本作成者、田中親美(1875-1975)によるものが有名で、『佐竹本三十六歌仙絵巻』(1984)等模写からの複製本も刊行されている。模刻は古写本を透写したものを版下にして木版印刷したもので、『本朝名公墨宝』(1645)、『慶庵手鑑』(1651)のように古くから古筆の模刻がされている。大正7年から昭和17年にかけて刊行された稀書複製会による複製シリーズは原本を版下にした復刻が多い。しかし写真技術が高度化すると影印、即ちコロタイプ版あるいはオフセット印刷によるものが増え、「復刻日本古典文学館」や「日本古典文学影印叢書」は有名な叢書である(影印版の一覧として『国語学大辞典』(東京堂出版 1980)の巻末に「影印本書目」がある)。専修大学は1979年より所蔵する蜂須賀家本等の複製を順次刊行しており、最近では『平治物語絵』(2002)『信貴山縁起絵』(2002)のようにデジタル技術を用いた豪華な複製も刊行されている。またインターネット上で公開されている古典籍も多い。

古文書研究としてのファクシミリ

中世において、写本を作る技術は文字を書く写字生や縁飾りを作成するイリュミネーターによって担われた。写字生の実態はそれほど明らかになっているわけではないが、自分はこういう書体が書けるという広告文書がいくつか残っており(例えば Johannes vom Hagen, Hermann Strepel, Robertus de Ts 等によるもの)、読み・書き・そろばんという3Rを教えるのが職業であった人達もいる。当時、書く技術を体系的に教科書化することはそれほど行なわれていないが、造本ではグーテンベルクの『42行聖書』の彩色の手本として、1450年頃作られた『ゲッチンゲン・モデル・ブック』という写本が使われたことは有名である。1510年頃、アウグスブルクのベネディクト僧 Leonhard Wagner (1454-1522) は *Proba centum scripturarum* という習字帖を作成したが、これは様々な古書体を100種集めたもので、この中で彼自身もフラクツア体と呼ばれる書体のデザインを行ない、それは活字化され、その活字でマクシミリアン1世の時禱書が10部限定で印刷された(Augsburg, 1514)。この時禱書は欄外を Dürer や Altdorfer, Cranach といった著名な画家たちにより装飾されたが、それはまさに中世の時禱書の雰囲気そのものを出すための、手の込んだ書物作成法であった。

印刷本が普及する中で、活字をデザインする観点から、過去の書体を集めた本が刊行された。16世紀イタリアで刊行された G.B. Palatino: *Libro nuovo d'imparare a scrivere tutte sorte lettere* (1540), G. Tagliente: *Lo presente libro insegna la vera arte de lo eccellente scrivere* (1550), V. Amphiareo: *Opera ... nella quale si insegna a scrivere varie sorti di lettere* (1554) は有名である。しかし、印刷本は書体の統一を促し、古い書体を読み書きする機会は減って行く。こうした中で、古写本や古文書を正確に読む学問として古文書学 (palaeography) が成立して来るのである。前出

の J. Mabillon (1632-1717) は公文書の真贋の判断だけでなく、古記録一般について、物理的調査やテキストの調査により作成時代や作成地を判定する方法を確立し、以後、B. de Montfaucon: *Palaeographica Graeca* (Paris, 1708), A. Merino: *Escuela paleographica* (Madrid, 1780), T. Astle: *The origin and progress of writing* (London, 1784) のような研究書が刊行されている。それに伴い、古文書学を教える機関も設立され、ドイツでは1801年にゲッティンゲン大学に古文書学の講座が設置されたし、フランスでは1821年に古文書学校 (École des chartes) が創られた。

この時代はリトグラフや写真術の発明と重なり、フランス古文書学校は早くも1835-40年に、王立図書館 (Bibliothèque royale) 蔵の古記録のリトグラフによる複製を開始しているし、1880-87年には古文書学教育目的にファクシミリ集 *Recueil de facsimilés à l'usage de l'École des chartes* を刊行している。

ファクシミリではないが、歴史史料を集成して活字化した刊行物も18世紀から刊行されており、イタリアの史料集 L. A. Muratori: *Rerum italicum scriptores* やドイツの史料集 *Monumenta Germaniae historica* は定評のある史料として、中世史研究者の基本資料になっている。

ファクシミリの刊行状況

複製本の刊行が盛んになるきっかけは、前出のロクスバラ・クラブ (1812年設立) による一連の複製刊行である。同クラブでは会員が自らの蔵書の複製を刊行することを義務付けられ、1814年から今日まで250点以上の複製を刊行して来ている。写本より印刷本の複製の方が多く、*The Black Prince, written in French, by Chandos Herald* (1842)、*The Apocalypse of St. John* (1876)、J. Mielot: *Les Miracles de Notre Dame* (1885)、*The Metz Pontifical* (1902)、*The Trinity College Apocalypse* (1909)、*The Sherborne Missal* (1920) 等は同クラブ初期の写本複製である。

19世紀後半に入ると複製技術が発達し、多くの複製が刊行されるようになる。1873年には *Palaeographical Society* が *Facsimiles of manuscripts and inscriptions* という資料集を、1903年には引き続き *New Palaeographical Society* が *Facsimiles of ancient manuscripts* を刊行しているが、これらは古文書研究者向けの資料集あるいは読解の教材としての複製である。イタリアでは1882年から *Archivio paleografico italiano* という叢書が、スイスでは1954年から *Chartae latinae antiquiores* という叢書が刊行されているが、これらも古文書の複製を集成したものである。この時代は書誌学の新しい方法論が提唱され、活字の形態で印刷者を特定・識別する自然史的方法で有名な Henry Bradshaw (1831-86) の名を冠したロンドンの *Henry Bradshaw Society* が1890年より *Anthiphonary of Bangor* や *Stowe Missal* 等の複製を刊行した。中世楽譜の写本については1889年から *Paleographie musicale* という複製集が刊行されている。

ヴァチカン図書館の所蔵する写本の複製を刊行する事業は1889年から *Codices e*

Vaticanis selecti phototypice という叢書で始まり、その他いくつかの叢書が刊行されて来ており、日本の岩波書店もこの事業に途中から参加している。戦後には複製技術が格段に進歩し、Akademische Druck- u. Verlagsanstalt、Edilan、Il Bulino Edizioni D'Arte、Franco Cosimo Panini、Moleiro Editor、Scriptorium Ediciones、Testimonio Compañía Editorial といった出版社が美しい彩色写本の複製を刊行している。

後出の Zotter 目録によれば、新刊ファクシミリの点数は年によって大きく異なり、特に二つの世界大戦時には殆ど刊行されていない。一方、刊行点数の多かった（25点以上）年代は1909年、1960年、1973年、1977年である。

最近では CD-ROM 形態でも刊行され、*Theodore Psalter*、*Book of Kells*、*Beowulf*、*Wycliffe Bible* 等は CD-ROM でも見ることが出来る。

ファクシミリ目録の例

以上のように多数刊行されて来ている写本のファクシミリは、特に古い資料を所蔵している図書館では熱心な収集対象となっており、写本を扱っている部局がファクシミリも管理している例（英国図書館やフランス国立図書館等）もある。また、ファクシミリの展示会もしばしば行なわれており、筆者の知る限りでも1984年に東京芸術大学で「西洋中世の彩飾写本：ファクシミリ展」が開かれ、東京都立中央図書館では1998年に「美しき装飾写本」という常設展示を行なっているし、同年、獨協大学図書館でも「西洋中世写本 ファクシミレ版コレクション展」が行なわれ、同大学では2002年にも展示を行なっている。また海外では、1988年にルクセンブルグ国立図書館で *Copie ou fac-simil* と題した展示会が行なわれており、いずれも解説目録が刊行されている。

ファクシミリの収集に熱心な図書館は所蔵するファクシミリの目録を刊行しており、早い例としてはフランス国立図書館の *Listes des recueils de fac-similés et des reproductions de manuscrits ...* (1903) があり、同じ頃、R. Poupardin et al. : *Listes des recueils de fac-similés et chartes* (Bruxelles, 1905) も刊行されている。また、古文書学・写本学全般の書誌である L. E. Boyle: *Medieval latin palaeography; a bibliographical introduction* (Toronto, 1984) はファクシミリ版の情報を多数収録している。

しかし、複製写本を最も網羅的、体系的に収録した目録は Hans und Heidi Zotter: *Bibliographie Faksimilierter Handschriften* である。初版は1976年に刊行され、収録数は637件（件数はオリジナル写本の数で、複製の刊行数ではない。同じ写本に対し何種類も複製が刊行されている場合もある）であったが、1992年には第2版が刊行され、収録数も1,052件に増えている。1996年にはフロロピイ・ディスク版も刊行され、1999年からはインターネット上でも公開されている（アドレスは <http://www.kfuni-graz.ac.at/ub/sosa/faksbib/>）。

この目録は写本の所在都市、所蔵館、写本番号、著者・書名、全葉数、^{シュゴール}支えの材質、

サイズ、筆写者・地・年、複製の書誌事項、複製のタイプ（完全か部分か、原色か単色か、解説の様態）等を記載しており、後出の「複製西洋中世写本目録」もこのスタイルを踏襲している。ちなみに、Zotter に収載されている写本の所在都市を収載点数の多い順に並べてみると次のようになる。即ち、パリ 99、ヴァチカン 85、ロンドン 66、ウィーン 59、コペンハーゲン 53、ミュンヘン 36、オックスフォード 34、ストックホルム 30 という順になっている。

現在では、所蔵するファクシミリ写本の目録をインターネット上で公開している図書館もあり、例えば Michigan State University Libraries、Pennsylvania State University Libraries、Library of Medieval Institute、University of Notre Dame、University of North Carolina at Chapel Hill、Stanford University Libraries 等の目録をネット上で見る事が出来る。

インターネット上のファクシミリ

最後にインターネット上に公開されている中世写本について簡単に述べておきたい。御承知のように、現在、インターネット上でゲーテンベルクの『42行聖書』は4部が全文画像公開されている（慶應大学 HUMI Project によるもの、British Library 所蔵のもの2点、Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen 所蔵のもの）。さらに他のコピーもデジタル化されつつあると聞く。今後はもっと公開が進むであろう。中世写本のデジタル化で先駆を果たしたのはフランス国立図書館の展示会サイト *Le roi Charles V et son temps (1338-1380)* であった。同サイトでは「フロワサール年代記」「カタロニヤ図」「フランス大年代記」等が公開されている。オックスフォード大学も写本の公開を進めており、Early Manuscripts at Oxford University というサイトではボドレイ図書館の持つプラトン「ティマエウス」やコーパス・クリスティ学寮の持つ「農夫ピアズ」等の写本を見ることが出来る。さらには以下のようなサイトが写本の公開に熱心である。

DScriptorium (Brigham Young University)

Très Riches Heures de Moyen Âge (University of Illinois)

Aberdeen Bestiary (University of Aberdeen)

Hill Monastic Manuscript Library

Leaves of Gold (Philadelphia Museum of Art)

断片の公開を含めると、さらに多数のサイトで中世写本を見ることが出来る。紙形態のファクシミリだけでなく、ネット上の写本を利用すると、かつては近寄りがたかった中世写本に容易に接することが出来るのである。

(おりた ひろはる 書誌部外国図書・特別資料課)